

養鶏密集地域での高病原性鳥インフルエンザ発生を 想定した防疫演習

上北地域県民局地域農林水産部十和田家畜保健衛生所

○小田 桐千鶴 恵 佐怒 賀香 澄
 佐藤 郷子 角田 公子
 藤掛 斉 八重 樫恵 嗣
 中里 雅臣 佐藤 公伸
 中島 聡

1 はじめに

県の東部に位置するM市には、大規模採卵鶏農場2戸151万羽及び同一系列の肉用鶏農場16戸97万羽が飼養されている。これは管内の飼養羽数の70%にあたり、全ての農場が半径3km円内に含まれる県内有数の養鶏密集地域となっている。

また、食鳥処理場もこの地域に含まれ、高病原性鳥インフルエンザが発生した際の被害は甚大と考えられる(図1)。

M市の飼養状況

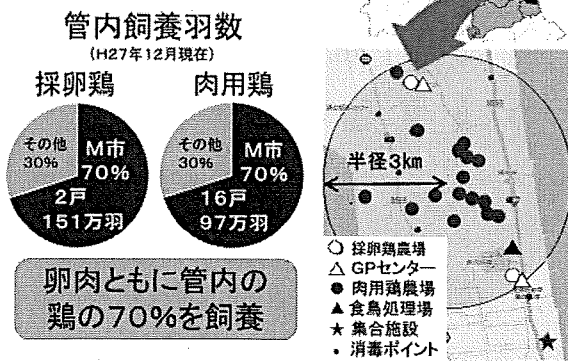


図1 M市の飼養状況

2 当所の取り組み

(1) これまでの取り組み

これまで当所では、高病原性鳥インフルエンザが発生した場合を想定し、ロールプレイング方式の机上演習や防護服の着脱・車両消毒を中心とした実動演習を行ってきた(表1)。しかし、M市のような養鶏密集地域での発生を想定した演習は少ない。また、演習参加者から「従来の演習方法では各役割担当や検討内容が不鮮明で、やるべき内容について事前準備が必要」「限られた検討時間を有効に、かつ円滑に進行させるため、演習での理解度を上げたい」「演習で検討・作成した資料や様式を整備するなど成果として残した方がよい」等の意見が挙げられた。

表1 これまでの防疫演習の概要

	H24	H25
想定農場	Y町肉用鶏	
机上方法	ロールプレイング方式	
実動内容	着脱・消毒	着脱・消毒・ テント設置

(2) 防疫演習への事前準備

当地域では25年度に策定した地域マニュアルにより各部署の役割分担を明確化し¹⁾、これをもとに26年度から、より実践的な防疫

演習にするため、事前準備型のシナリオ方式で行うこととした。

防疫演習の実施にあたり、担当者による打合せ会議を開催し参加する各部署担当者に実在する農場をもとに設定内容を説明し、防疫作業に必要な資料の作成を依頼した。

各部署内では設定内容を検討し、それに基づき作業計画書やレイアウト、必要資材のリストなどを実際の発生時に使える形の資料として作成した(表2)。

表2 事前準備の内容

班	担当	内容
支援班	地域連携部	現地調達資材確認・発注
集合施設班	林業振興課	集合施設の設置運営
健康調査班	地域健康福祉部	健康調査、感染防止対策
埋却作業班	水利防災課	埋却計画作成
消毒ポイント班	農業普及振興室	緊急消毒ポイント運営
発生・近隣市町村	M市・T町・R村	制限区域リスト作成、住民説明会

この事前の検討により、それぞれの担当者が役割を明確に意識し、自主的に考え、それを部署内で共有することが可能になった。

(3)シナリオ型の机上演習

演習は簡易検査陽性から現地対策本部設置までの初動対応について、各担当部署の事前準備資料をもとに、シナリオ方式を採用し作業内容のシミュレーションを行った(図2)。

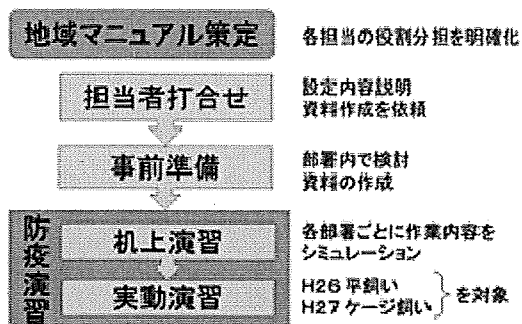


図2 防疫演習までの流れ

演習当日は想定時間と演習時間の差をなくすため、発生からの経過時間を短縮して表示できる時計を設置し、これに基づいて各部署が同時進行で作業を進めた。このことにより、防疫措置開始時間までの作業のスピード感を体験してもらった。

演習者とコントローラーとは連絡票を使用し、結果を黒板に記載することで他部署との情報を共有した(図3)。

事前に必要な資料の検討・作成を行った結果、想定外の項目についても対応が可能となり、また、設定時間内に成果を出すために他部署の動きに合わせた連携も可能となった。

この演習方式で想定農場を変え2年継続することで、県民局内の連絡体制及び対応能力の向上が図られた。



図3 机上演習

(4)実践的な実動演習

飼養形態の異なる鶏舎内における一連の防疫作業を体験するため、26年度は一般的な肉用鶏の平飼い鶏舎、27年度は採卵鶏のケージ飼い鶏舎での発生を想定した演習を行った(図4)。

演習には、実際の資材と模擬鶏を使用し、実際に近い防疫作業を疑似体験するための情景を作り、参加者全員が体験・見学できるようにした。

平飼い農場		ケージ飼い農場
H26	年度	H27
肉用鶏 4.7万羽	飼養羽数	採卵鶏 21万羽
6棟	鶏舎数	14棟

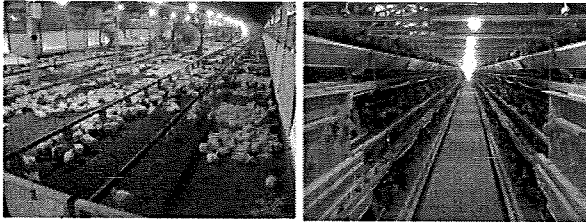


図4 実動演習の想定農場の概要

① 平飼い鶏舎における実動演習 (H26)

テントを鶏舎に見立てた平飼い鶏舎を再現し、一連の防疫作業を訓練した。

鶏舎内ではコンパネを用いた追込みから捕鳥、ポリペールへの投入と台車による運搬を行った(図5)。



図5 平飼い鶏舎での捕鳥・運搬

その後、炭酸ガス注入による殺処分と殺処分鶏のフレコンバックへの投入作業を行い、肉用鶏の平飼い鶏舎での流れを確認した(図6)。



図6 平飼い鶏舎での殺処分

② ケージ飼い鶏舎における実動演習 (H27)

作業実施にあたり、採卵鶏農場内での作業のイメージを共有するため、実際の農場で行った現地検討会の様子をビデオで上映し、参加者全員でケージ飼い鶏舎内での作業を確認した(図7)。



図7 ビデオ上映による鶏舎作業の確認

演習では、採卵鶏鶏舎に共通の構造の高さと狭さの多段ケージの鶏舎内を再現し、幅60cmの通路を幅47cmの台車によるピストン輸送と、一方通行による運搬など、ケージ飼い鶏舎に対応した防疫作業を体感した(図8)。



図8 ケージ飼い鶏舎を想定した防疫作業

3 演習の成果と課題

(1) アンケート結果

演習後のアンケートから、両年度とも発生農場での防疫対応について、全ての訓練者が鶏舎内の作業について理解できたとの回答が得られた。

また、演習を行った感想として、「ケージの上り下りに気を使わなければならないので

大変そうだ」「鶏舎内の通路が想像以上に狭く、高さによってより狭く感じる」「実際に農場内での作業も体験したい」などの意見が出された。

一方で、「体力に不安がある」「従事後の心的外傷が心配」「ゴーグルにくもり止めをしても限界があるのではないか」などの不安感を示す意見も出された(図9)。

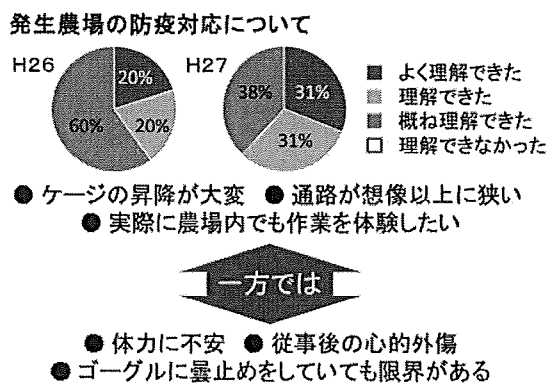


図9 アンケート結果

(2) 演習内容のとりまとめと冊子化

演習によって現地対策本部構成員及び動員者としての一連の防疫対応の流れを把握することができた。この机上演習での作成資料や検討内容及び実動演習の作業内容等を取りまとめ、発生時の参考資料として冊子化して県民局内に配布した(図10)。

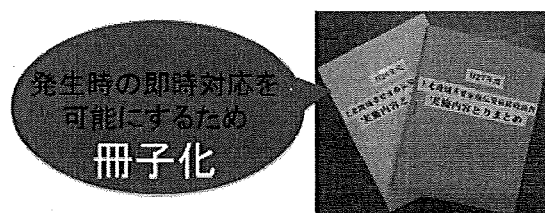


図10 演習をとりまとめた参考資料

(3) 集合施設の設営演習

これまでの演習内容を検証するため、県の防疫演習によりM市で発生した場合の集合施設の設営と備蓄資材受入等の運営に関する実動演習も実施した(図11)。この演習にとも

ないM市で発生した場合の集合施設候補3か所のリストアップの中から利便性等を考慮し1か所に集約して設定することとした。

設営演習

- M市における集合施設候補を1か所に設定
- 集合施設の設営
- 資材受入等の運営



図11 設営演習

4 今後の課題

今後の課題として、大規模農場や同時に複数農場で発生した場合を想定した資材調達方法及び人員確保、他の市町村での発生を想定した場合の資料作成等、新たな課題が浮き彫りになった。これらの課題については来年度以降の防疫演習で検討することとした。

5 まとめ

今回の事前準備型のシナリオ方式による机上演習の実施、演習の内容と資料の冊子化により関係部署の連携強化と対応能力向上が図られた。

また、平飼い鶏舎及びケージ飼い鶏舎をイメージした実動演習により、異なった飼養形態の鶏舎での一連の防疫作業への習熟が図られた。

今後も演習を継続し課題等を抽出・検討することにより、発生時の迅速かつ的確な防疫体制の構築に努めたい。

参考文献

1) 川畑清香, 赤沼保: 高病原性鳥インフルエンザ防疫体制確立に向けた地域マニュアル検討と協力体制強化, 青森県家保業発, 2014